

=====

霊媒遊戯

=====

暗転、暴風雨の音
完全に暗闇の中、走ってくる足音が聞こえる
息を切らしているあずさとしんじ

あずさ: はあはあ、もうだめ
しんじ: バカ、あきらめんなよ
あずさ: だって、もう走れない！
しんじ: ほら
あずさ: ちょ、ちょっと、勝手に手つながないでよ！
しんじ: しょ、しょうがないだろ！お前が走るの遅いから
あずさ: 言っとくけど、手つないだくらいでなんか、勘違いとかしないでね
しんじ: な、なんだよそれ！

SE: 風雨の音が一度大きくなってまた下がる

しんじ: ほらそこ
あずさ: え、ここ？ やだ暗い
しんじ: いいから
あずさ: 電気は？
しんじ: 今スイッチ探す。あれ、ないな
あずさ: ええ！？
しんじ: うーん、ない
あずさ: もう、ちょっとー
しんじ: がまんしろよ

はあはあ、という息づかいを整える2人
依然として暗闇のままである

あずさ: なんか、濡れて寒い
しんじ: ああ、走ってるうち、傘どっか行っちゃったな
あずさ: ハクション！
しんじ: とりあえず、大丈夫だから
あずさ: うん、ハクション、ちょっと、着替える
しんじ: ええ！

あずさ:濡れたままだと寒いから！

しんじ:う、うん

あずさ:えーと、ちょっと…(ガサゴソと何かを探っている)あった！これかな

しんじ:も、もういいか？

あずさ:そんな早く着替えられるわけないでしょ！

しんじ:わかってるよ！

あずさ:ハクション！

しんじ:まだかよ、風邪引くぞ

あずさ:うるさいわね、待ってよ、

しんじ:つつく…

あずさ:ちょっとあんた、絶対こっち見ないでよ。

しんじ:ば、ばか、誰が見るか。つか見えねーし。

あずさ:ええと、これかな。うーん、見えない、わかんない、あれー。あ、そうだライト…あれー、あれ、ないな。

しんじ:え？ 懐中電気？

あずさ:そう、あれー？

しんじ:ああ、俺持ってるよ、ほら(と、あずさを照らす、照らされたあずさは着替えの最中)

あずさ:キャー！ちよ、ばかー！！(いかにも着替え途中つばい体勢を崩しながら)

しんじ:あ、わ、わるい！(と懐中電灯を消す)

あずさ:もう、バカ！！スケベ！！ヘンタイ！！！！

しんじ:電気って言うから！

あずさ:着替えてんだから！あ、あれ、あれ？

しんじ:ん？

あずさ:今で服どっかいった、どっかいったよ！？あれー？

しんじ:え、その辺ないのか？(と、またあずさを照らす)

あずさ:キャー！！(またしても着替え途中)

しんじ:わ、わ！しまった(と点いたままの懐中電灯を取り落とす)

あずさ:ちょっとー！(と、それを急いで拾って消す)

しんじ:わるい！

あずさ:何すんのよバカ！

しんじ:だって、

あずさ:わざとでしょ

しんじ:ば、ばか！

あずさ:ぜったいわざとよ！

しんじ:ふ、ふざけんなよ、なんでわざとだよ

あずさ:じゃ、なんで点けるのよ！

しんじ:間違えたんだよ！

あずさ:間違えたって、こんなの間違いで点くようなものじゃないでしょ！(と点ける)キャー！！(点いたまま取り落とす)

しんじ:(それを拾って消す)ほら、ほら！点いたじゃんかよ！

あずさ:ち、違うわ、今のは間違えて

しんじ:俺だって間違いだよ！間違いやすいんだよほら(と点ける)
あずさ:キャー！ちょっと！(奪って消す)わざと！今のはわざと！！
しんじ:違うって言ってんだろ！
あずさ:だって、今あきらかにこうやって(と点ける)キャー！！(点けたまま取り落とす)
しんじ:自分だろ！
あずさ:違う、(と拾って消し)だから、あんたがさっきこうやって(と点ける)キャー！！バカ！(と、しんじを平手打ち)
しんじ:イテっ！
あずさ:(電灯を消して)このスケベ！何考えてんのよこんなときに！サイテー！！
しんじ:だっておまえが
あずさ:ふん、そうやってすぐ人のせいにする。ガキなんだから
しんじ:ガキだと！
あずさ:…いいから、ちょっと離れててよ。服探してんだから
しんじ:なんだよ、誰のためにこんなことしてんだよ…

しばらくガサゴソとあずさが着替える音がする
着替え終わったところであずさが手持ちの懐中電灯を点ける
あずさはすっかり着替え終わっている
懐中電灯の明かりで部屋の明かりのスイッチを見つけたしんじが、部屋の明かりを点ける
床にはあずさがさっきまで着ていたらしい、しんじの少年モノの衣服とランドセル。
しんじは半ズボンにランドセルを背負っている。
どうやら二人は(かなり無理矢理)小学生らしい。2人共髪が雨に降られたように濡れている。

あずさ:こっち向いていいわよ
しんじ:お、おう
あずさ:…あんたも着替えないと風邪ひくわよ
しんじ:俺の着替えそれしかねえもん(あずさが脱いだ少年モノの服を指して)
あずさ:あ、そっか…。
しんじ:…いいよ、寒くないし。
あずさ:え…ちよ、別にごめんとか思ってたんじゃないんだからね！
しんじ:は？
あずさ:あんたが着ろって言ったから着たんだから…
しんじ:だって、男子と女子の2人組みだったらすぐわかつちゃうだろ
あずさ:わかってるわよ！もういいから、さっさと力使って駿之介君、呼び出してよ
しんじ:そうだな、ここもいつみつかるとかわかんねえし、早く駿之介、を…(フラついて倒れる)
あずさ:え？ちょっとどうしたのよ
しんじ:いや、大丈夫(大丈夫そうではない)
あずさ:あ、(しんじの額に手をあてて)ひどい熱！
しんじ:さ、触んなよ！
あずさ:あんたちょっと、やっぱ寒いんじゃない？
しんじ:寒くねえよ

あずさ:ほんとに寒いんでしょ、
しんじ:寒くねえ
あずさ:寒いんでしょ
しんじ:大丈夫だって言ってんだろ
あずさ:白状なさい、寒いんでしょ？
しんじ:…ちょっとだけな
あずさ:サイテー！（バチン、平手打ち）
しんじ:へ？？？
あずさ:あたし、絶対いやよ！
しんじ:え？
あずさ:あれ…でしょ？雪山でしょ
しんじ:は？
あずさ:雪山で、濡れたものは、その、脱いで、お互いの体温で温めて？イヤー！！もうー…どうしてこうなるのよ（脱ぎはじめ）
しんじ:ちょちょちよと待てよ！！
あずさ:なによ！
しんじ:なにしてんだよ？
あずさ:お互いの体温で温めないと死んじゃうでしょ！？
しんじ:ばか、そこまで寒くねえよ
あずさ:山をなめないで！
しんじ:ここ山じゃねえだろ！バカ！
あずさ:だから山だったらの話よーウワーン（泣）
しんじ:おい…なんだよ、これだから女は嫌なんだよ
あずさ:なによ、偉そうに。わたしだって、女って文字を男に置き換えれば男よ！
しんじ:ん？とにかく、大丈夫だからよ。さっさとはじめようぜ
あずさ:そうして。わたし大事な話があるんだから
しんじ:そんなに駿之介が好きかよ
あずさ:あたりまえでしょ
しんじ:けっ、熱い熱い！火傷しちゃうぜ
あずさ:いつそ、焼け死んじゃえ
しんじ:ケロイドー（既に私語だが、かつて流行語だったゲロゲローの言い方）
あずさ:キャノノノ（爆笑）
しんじ:え？おもしろいか
あずさ:ううん、嘘笑い
しんじ:なんでだよ？
あずさ:いいからはじめて
しんじ:ああ

しんじ、立ち上がって、数珠的なものを手にし、厳かに真言(マントラ)を唱え始

めるあずさ、ひざまづいて合掌し、目を閉じて祈っている
しんじの真言はかなり胡散臭い

しんじ: オン・アキャシャ・バヤ・ソワカ・キャマリ・ボリ・ナウボ・ボ・アキャシャギヤラ・オン・キャマリ・ソワカ・アキャシャ・オン・ナウ・キャ・アピラ・ウンケ・ン・ソワカ!

しんじ、崩れ落ちて倒れる。その後、何かが乗り憑いたようにゆっくりと起き上がって、

しんじ: あずさ…さ?

あずさ: 駿之介…くん?

しんじ: あずさ!

あずさ: 駿之介君なのね! 良かった、今年も会えた! よかった!

しんじ: 会いたかったよ、あずさ…

あずさ: 駿之介くん駿之介くん駿之介くん!! (合掌して狂ったように拝んでいる)

しんじ: ちょ、あずさ、拝み過ぎ! 神様じゃないんだから

あずさ: 似たようなものよ。この世に駿之介くんよりカッコいい男の子なんていないもん。

しんじ: そっか

あずさ: うん、一年に一度しか会えないけど駿之介くんは、わたしの自慢の彼氏なんだから

しんじ: ありがとう、僕もあずさみたいな可愛い子がずっと彼女でいてくれて、鼻が長いよ

あずさ: え? アハハハ、駿之介君、それを言うなら「鼻が高いよ」だよ

しんじ: あれ、そっか、いっけね

あずさ: ずっと会えなかったけど、わたし、毎日心の中で駿之介くんのこと考えてた。絶対忘れないようにって。

しんじ: 忘れないように?

あずさ: うん。だってね、去年のお盆にも、わたし、駿之介くんに会ったでしょ、その後ね、みんなにそのことを言ったの。そしたらみんな、急に駿之介くんのこととは忘れろ忘れろって言い出して。

しんじ: まあ…そうだろうね

あずさ: だから、わたし絶対忘れるもんかって。

しんじ: うん

あずさ: 六年になって新しく担任になった先生がね、「駿之介くんもわたしに忘れて欲しがってるから」なんて言ったのよ! ひどくない?

しんじ: あずさ……。

あずさ: わたし、一遍死んでみろって言ってやった。死んじゃえばいいって。そうしたら駿之介くんの気持ちがわかるから。

しんじ: そっか

あずさ: それで、先生ん家火つけてやった

しんじ: ええ! 小川先生んち?

あずさ:うん

しんじ:え、じゃあ、あの火事ってあずさが…

あずさ:あれ？なんで駿之介くん、「小川先生」って知ってるの？

しんじ:え、ああ、いやほら、しんじに聞いたんだよ、しんじに

あずさ:そっか。それで、すごかったんだよその火事。近くで見てただけで、焼け崩れた屋根とかの下敷きになって、先生ミンチみたいになっちゃって、もうぐちゃぐちゃの粉々になっちゃって。幸い、一命は取りとめたみたいだけど。

しんじ:生きてたんだ。

あずさ:うん。ケロイドー(ゲロゲロー)キャハハハ！

しんじ:よくないよそういうの

あずさ:嘘笑いよ。そんなことより、駿之介くん、約束のもの

しんじ:約束？

あずさ:うん

しんじ:あ、もしかして

あずさ:えへへ、しんじから聞いたときはびっくりしたけど、でも…そうだよ、駿之介くんも男の子なんだし、せっかく夏休みなんだから

あずさ、着ていた衣服を、照れながらもゆっくりと脱ぎ捨てる。

服の下には子供用のワンピース水着を着ており、そこには商品名「001 野口あずさ」と、その値段「¥ 120」と書かれた商品タグのパネルが貼り付いている。

しんじ、その姿を舐めるように見回して、

しんじ:あずさ…

あずさ:わたしもね、駿之介くんと一回くらい、海行きたかった…

しんじ:ありがとう、あずさ。僕うれしいよ(改めて、まじまじと見る)

あずさ:ちょ、ちょっと、そんな見ないでよ！もうびっくりした、まさか駿之介くんがあずさの水着がみたいなんて、そんなこと言いそうもなかったのに

しんじ:だって、あずさと海…行けなかったから…(と、ランドセルの中からさりげなく、本格的な一眼レフカメラと三脚、レフ板などの撮影機材を取り出しはじめる)

あずさ:駿之介くん。わたしも駿之介くんと海…って、え？ カメラ？

しんじ:あ、うん、…思い出を写しとこうと思って(いつのまにかサポートの黒子スタッフが出てきていて、レフ板を構えたり、撮影を手伝っている)

あずさ:え、え、でもそのカメラって、あれ？

しんじ:ほら、撮るよ(二、三枚撮る)

あずさ:あ、あれ…？

しんじ:ふう(満足げである)

あずさ:あ、も、もう着るね(再び衣服を着始める)

しんじ:うん

しんじ:それでね、あずさ

あずさ:なに？

しんじ:やっぱり僕たち、別れないか？

あずさ:え、いきなりなんで！？

しんじ:だって、やっぱり無理があるよ。僕ら、こうしてお盆にしか会えないし、それもしんじの体を借りてだし…

あずさ:そ、そんなのいいじゃない。わたしは平気よ、一年に一度でも駿之介くんに会えるなら

しんじ:でも、周りの人たちは変に思ってるだろ

あずさ:気にしないわ！

しんじ:しんじじゃだめかな？

あずさ:え？

しんじ:こう見えてこいつ、なかなか頼りになる奴なんだ、霊能力も使えるし、なによりその、生きてるわけだし

あずさ:なに言ってるのよ、こんな●●●野郎！（ひどい悪口）

しんじ:●●●…（ショックが大きい）

あずさ:わたしの彼氏は駿之介くんなの、一生駿之介くんなの！

しんじ:あずさ、僕、つらいんだ

あずさ:え

しんじ:あずさが僕のことをずっと思い続けてくれてるのはうれしいけど、そのせいで、まわりの人から変な目で見られて、それなのに僕はそんなあずさを守ってあげられない

あずさ:駿之介くん…

しんじ:その点、このしんじなら、いつも君をそばで守ってあげられるし、霊能力も使えるし、こう見えてこいつ、なかなか頼りになる奴なんだ

あずさ:いやよ！

しんじ:あずさ、もし僕のことを本当に好きだっていうのなら、これからはこのしんじのことを好きになってくれないか？

あずさ:駿之介くん

しんじ:こう見えてこいつ、なかなか頼りになる奴なんだ、霊能力も使えるし。あずさ、これが僕からの最後のお願い…

あずさ:ねえ駿之介くん

しんじ:ん？

あずさ:結婚しよう

しんじ:…え！

あずさ:2人の子供を作るの

しんじ:ええ！

あずさ:2人の子供ができたなら、先生やお母さんも、駿之介くんのこと忘れろなんて言わなくなると思うの

しんじ:いや、でも

あずさ:あ、先生はもう言えないだろうけど

しんじ:でも、僕たちまだ子供だし

あずさ:わかってる。子供が子供を作るなんて話聞いたことないわ。でも、なんだろう…やればできる気がするの！

しんじ:うん、まあ、ヤレばデキる…けど。

あずさ:ねえ、駿之介くんは、どうすれば子供ができるか知ってる？

しんじ: え? えーと、いや…知らない(知ってる感じである) あずさは?
あずさ: わたしも知らない…。どうしよう! それがわかないと結婚できないわ
しんじ: そっか
あずさ: でもね、わたし、ちょっと聞いたことあるの
しんじ: え、な、なにを!?
あずさ: キスすると子供ができるらしいんだって
しんじ: キス…
あずさ: この前ようこちゃんが言ってた
しんじ: キスカ…
あずさ: うん…
しんじ: えーと
あずさ: えーと
しんじ: えーと
あずさ: よーし、えい! (口をタコみたいに突き出してキスを催促)
しんじ: うわ!
あずさ: ハイ
しんじ: いや、えーと
あずさ: 駿之介くんお願い! (タコの口のまま言ってる)
しんじ: えーと
あずさ: ちゅうのすけくん(駿之介に迫りよる)
しんじ: わ、ちょ、ちょ、ちょっと待って!!!
あずさ: 駿之介くん!!
しんじ: や、違う、違うしんじ、俺しんじ!!
あずさ: え? しんじ! ちょ、バカ、くつつかないでよ(突き飛ばす)
しんじ: イテっ
あずさ: 何よ! どうしたの? 今いいところだったのに! 早く駿之介くん出してよ!
しんじ: いや、ちょっとまって、
あずさ: なによ?
しんじ: いやその、いくら霊能力でもさ、駿之介を呼び出してるとはいへさ、ほら…
あずさ: なに?
しんじ: その、実際は俺なわけじゃない
あずさ: なに、だめなの、霊能力でしんじに取り憑いてる駿之介くんにはキスしても、駿之介くんの子供にはならないの?
しんじ: え…
あずさ: どっちょ!
しんじ: や、いや、それは…(あずさを値踏みするように見て迷った後、) な、なるけど。
あずさ: じゃ、いいわ。早くして(タコの口でキスをせがむ)
しんじ: いや、でもほら、これ…俺のファーストキスにもなっちゃうわけだし
あずさ: いいじゃない
しんじ: え…

あずさ:だってあんた、わたしのこと好きでしょう
しんじ:え！な、ば、な、なに馬鹿なこと言ってんだよ！？
あずさ:だってそうでしょう？
しんじ:ば、ちが、違う！違うに決まってんだろ！
あずさ:バレバレよ！
しんじ:ちが、ちがう…(ごによごによと語尾が曖昧に)
あずさ:もう、時間ないんだから、その辺どうでもいいでしょ！！
しんじ:ど、どうでもよくは…
あずさ:あんたがあんたのままであたしとキスできる確立なんてゼロよ
しんじ:えっ…
あずさ:とりあえず、霊能力使ってでもわたしとキスできた方が得よ！
しんじ:得って…
あずさ:ほら、さっさと駿之介くんだしなさいよ(しんじを揺さぶる)
しんじ:ちょ、やめろよ
あずさ:いいから、だしなさい
しんじ:ちょ、ちょっと
あずさ:いいから！(揺さぶった拍子にしんじを押し倒してしまう)
2人:あっ

あずさがしんじを押し倒して、距離が近いところで固まる2人

しんじ:……
あずさ:……
しんじ:……こういうの……よくないよ(少女のような弱弱しさ)
あずさ:はあ？ こここまできて何言ってるのよ！
しんじ:あずさはそんな、嫌がってる奴に無理矢理キスして楽しいのかよ
あずさ:夏休み入る前に、校長先生が言ってたわ。「人の嫌がることは、自分から進んでやりなさい」って。
しんじ:それ意味違うよ
あずさ:いいじゃない！わたし、子供が欲しいのよ！駿之介くんの。だって、だって、そうしないと、わたし最近どんどん駿之介くんのこと忘れていっちゃうんだもん。
しんじ:あずさ…
あずさ:今日あんたに会いに行くって言ったら、お母さんすごい怒ってた。霊能力なんて嘘だって、インチキだって。死んだ人間には二度と会えないんだって。だから、来年のお盆は、あんたに会わせてもらえないかもしれないわ。これが最後かもしれないのよ！
しんじ:……。
あずさ:おねがい、駿之介くん出して
しんじ:やっぱり、やだよ
あずさ:なんでよ！じゃあ多数決にしましょ、キスする人！ちょっと手、あげなさいよ！あんただけよ、あげてないの
しんじ:だってさ、やっぱりキスって、その、本当に好きな人とするもんだろ！
あずさ:だからいいじゃない、わたしは駿之介くん、あんたはわたし、問題ないでしょう(タコの口)

しんじ:俺は…俺は、あずさが俺とじゃなきゃ…やだ

あずさ:はあー、あんたの気持ちなんかどうでもいいでしょ！

しんじ:よくねえよ！

あずさ:ケチケチしないで！あんたみたいのがわたしと一緒にいられるだけでも贅沢なんだから、こんなの、なんか基本使用料みたいなものよ

しんじ:基本使用料？

あずさ:そう、携帯の。ああ、わたし、携帯買ってもらったの。ほら(携帯を出す)

しんじ:へー。

あずさ:メアドあとで教えるから。

しんじ:うん

あずさ:あ、そうだ！ねえ、あの世って携帯ある？

しんじ:え？あ、ああ、あるんじゃないかな。

あずさ:ほんと！じゃあ駿之介くんにアドレス教えたらメールできるかな！？

しんじ:あ、ああ、できると思うよ。

あずさ:ほんと、じゃあ教えなきゃ！やった！これ、メアド書いていつも持ってるの(メモを渡す)

しんじ:ああ

あずさ:じゃあ、ほら、駿之介君だして。キスするわよ

しんじ:え、でもほら、メールできれば駿之介のこと忘れないんじゃない？

あずさ:それとこれとは別よ、ほら、こい！(タコの口をパクパクしてキスを催促)

しんじ:…わかったよ、するよ

あずさ:あ、言ったわね。武士に二言はないわよ

しんじ:武士じゃねえけど

あずさ:じゃあ武士になって！

しんじ:だけどさ、一つ

あずさ:なに？

しんじ:俺、ファーストキスは…その、体育館裏でって決めてるんだよ

あずさ:はあ？なにそれ、馬鹿みたい

しんじ:いいだろ！別に

あずさ:もー、めんどくさい男ね！じゃあそこ行けばするのね、ほら行こ！(連れてこうとする)

しんじ:あ、おい、かばん(荷物を置きっぱなしなのを指して)

あずさ:ああ。(荷物を取りに戻り、それを拾おうとしやがんだ瞬間…)キヤー——！！

しんじ:ど、どうした？

あずさ:ね、ねえ…なんか、わたし達、見られてない？この部屋、なんか、たくさん人がいるような…(二人を覗いている観客たちを指して言っている)

しんじ:ああ。…お前、怖がるかと思って言わなかったけど、お盆だからさ、その、あの世からたくさん人が帰って来てるんだ。さっきからずっとまわりに居たぜ

あずさ:え…待って、じゃあしんじ、あんた…本当に霊能力があるの？

しんじ:え？

唐突に暗転

SE:風雨の音が大きくなっていく。

ボリュームが上がりきったところで転換用の M が in

了